校長先生の部屋だより

哲学ルームだより

この「哲学ルーム」は、生徒、先生の区別なく、共に学校スローガンである「人間を学ぶ」空間です。

今回も前回に引き続き「人格」についてです。「相手に人格を認めるのはどういう場合か。」です。

A：人格というのを辞書で調べてきました。そうすると、「人としての価値」ってのってました。

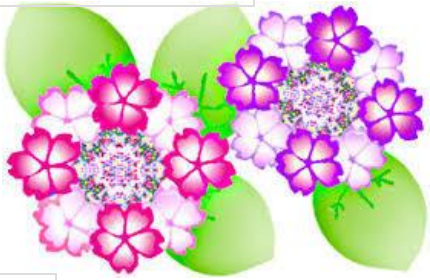
―なるほど。価値って何だろう。値段のことかな。この人はいくら？ってこと？
A：どれだけ優れているかということだと思います。
B：でもそれは人によって違うと思います。
C：ある人がバナナが好きって言ったらその人にとってバナナは価値があるし、嫌いなら価値はない、ということだと思います。

―好き嫌いで人の価値を決めていいのかな。
B：価値は人間が作ったものだと思います。だから人間が基準です。

―その「人間」って人それぞれってことだよね。誰かにとっての価値ではなく、その人自体の価値というのはないのかな？

A：それはあると思います。
B：僕はないと思います。価値は他の人が勝手に付けるものです。

―A 君の意見を聞いてみよう。
A：その人自体の価値というのは全員同じだと思います。それは命の重さで、生きている以上その重さは同じです。



―それは人格とは違うの？
A：違います。命の重さに人格がプラスされるのだと思います。

―なるほど。それで人格者がいたり、そうでない人もいるってことだね。
A：そうです。
C：そうなると人間も,蟻もゴキブリも蚊も同じ命の重さということにならない？

―たしかに人間は蟻を踏みつぶすけど、人間は踏みつぶさないね。ゴキブリは殺すし、蚊はピシャで終わりだね。
B：人間は自分がえらいと思って、蟻などを下に見ているんです。強いものが弱いものの価値を奪っているんです。価値はもともと無いけれど、こうして価値が作られるんです。
A：僕は命は奪えても価値は奪えないと思います。

―ずいぶん難しくなってきた。価値って何だろう。人格とから絡めて考えて見ようね。今日はここまで。また来てね。